

マンガ学のすゝめ

日下, みどり
九州大学比較社会文化研究院 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/16800>

出版情報 : 西日本新聞, 2002-01-25. 西日本新聞社
バージョン :
権利関係 :

マンガ学 その11 のすゝめ

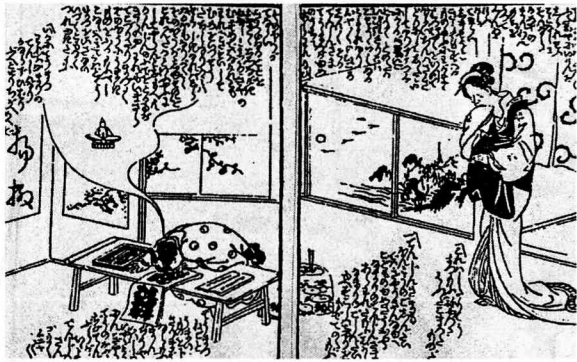
「子どもの遊び」である。日本は昔から「子ども文化」の発達した国だったのだ。これと対照的なのがフランスで、今なお児童文学本木の地である。漫画も、フランスの漫画は大人文化の周縁にあるアートであり、日

日下みどり

今ではマンガをはじめ、アニメやゲームは日本を代表する文化として世界に輸出されている。だが、一体なぜ日本でこれらの文化が発達したのだろうか。共通点は何だろうか？ 答えは

子ども文化とマンガ

十返舎一九にみるルーツ



本のそれは子ども文化から成長した読み物という本質的な差がある。この原因に、フランスでは子どもは不完全な存在で一人前とみなされないが、日本は伝統的に子どもを大事にする社会で

あつた。いつかあるかもしれないが、日本の国鳥が、焼野のひなを守る

いう焼野の雉(とび)である(とびが焼野の雉である)。幼い読者相手に室町時代にはすでに「御伽草子」と

黄表紙へとつながってゆく。なお、戦後手塚治虫を生んだ「赤本マンガ」の赤本は、これと関係があるのかもしれない。よ、「目立

物語は、勉強嫌いで寺子屋を追い出されてばかりいる息子長松に梅絶ちの願をかけ、子どもの勉強し達を願うというもの。長松は散々わがままを言ったあげく、ようやく天神様の導き

最近では行過堂(アキハ)を「おま」なまに馬鹿にするが、大人になっても子どもの心を持って何かを面白がるというところは、基本的には悪いことではないはずだ。何かを楽しいめる人はいつまでも若々しい。老後のためにいらない。楽しみを作っておけば、年をくぐっても退屈はないだろう。ひょっとしたら将来、老人ホーム(コシテ)マンガ同人誌の即売市場や同人誌だつて出てるかもしれない。大人文化としてのマンガには、まだまだ可能性が残されているのだ。

ついつい物語文化はやがて、江戸時代に子ども用の絵入り読み物(赤本)表紙が赤なの(とび)呼ばれる)となつて受け継がれてゆく。赤は魔よけの意味をもつ色であり、縁起物の疋巻絵なども紅刷りであった。子ども用の絵本に縁起の良し赤を使うのは、子どもの無事を願つてのこと。正月(正月)祝儀用に買われたりした(とび)。この赤本はやがて青本、黒本へ変化し、大人の読み物である

文化というものは途切れたらダメで、意外に繋がっている(とび)があるものだ。(とび)黄表紙の作品を(とび)紹介しよう。「初頭山手習方帖」は十返舎一九作である。一九は「東海道中膝栗毛」の作者としてよく知られているが、絵画もなかなか腕前。現代に生まれていたらマンガ界の巨匠になっていたかもしれない。

明治になると子ども用の雑誌が刊行され、そこに児童小説に交じって漫画も掲載されるようになった。「おま」(冒険)、「吉」(タラシヤ)、「おま」(おま)は、後に大きな影響を与える漫画作品が掲載される。こうい

た漫画文化の発達が出れば、後に手塚治虫が出てくることもなかったかもしれない。日本でマンガが発達した原因はいくつかあるが、「子ども文化の発達」もその一つであろう。

九州大学大学院教授